

第五回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集

2019.2.2



長崎幻花

有馬 敲

友

村田 辰夫

ポケット

武西 良和

分身たち

和比古

友

清水 崇彦

世界

小湖舎 伸行

基準

小湖舎 伸行

レモンとサイレン

小湖舎 みなみ

真の友

さき あけみ

アサイさん

市原 礼子

詩人の魂

上村 多恵子

友よ

長岡 紀子

親愛

浜田 千秋

声を大にして

加納 由将

S i r e n

波野 仁

病気だった友

下田喜久美

長い月日

根来真知子

秋のミモザ

北原 千代

詩の蜜酒

すみくらまりこ

長崎幻花

有馬 敲

霧雨の降りしきる道ばたに

あじさいの球の群れが揺れている

「こちらのほうでは

へおたくさ」と呼ばれております」

土地のすらりとした少女は

うす紫に開く花の前に立ち止まり

両眼を細めてうつむくと

紅いこうもり傘のなかではお笑んだ

ゆつくり歩く切り通し

濡れた石だたみの坂道は

さきほど見てきた大きなべつ甲の

ぬめぬめした背中を想いださす

丘の上のミッションスクールから

下校する女学生が 三々五々

羽ばたく足取りですれ違つて

古い洋館の側を通り抜け

ロザリオと関係がないおしゃべりをして

下界の家へ帰つてゆく

♪ ^{あッか}赤とバイ・・・ ^{あッか}赤とバイ・・・

ふいに耳が鳴って

案内してくれた少女の口ずさむ唄が

別れたあとからよみがえり

紅いこうもり傘のむこうから

あの戦火に焼かれた坂道の多い街の姿が

まっ赤に浮かびあがってきた

ぎざぎざになった深い入江

霧雨が降りしきる視界のなかに

淡紅に変わったあじさいの球の群れが

わずかに揺れている

友

村田辰夫

悪友 畏友 益友 学友

旧友 級友 交友 親友

戦友 知友 朋友 盟友 僚友

獵友もあるが これは関係ない

あいうえお順に並べてみたが

それぞれの背後に顔が浮かぶ

目尻の皺や口元の歪み

その時その場で聞いた言葉や仕草が

松影越しに見る月のように漂う

満月なのか 三日月なのか

そのなかにたった一人

僕を「畏友」と呼んでよいかと

尋ねた友がいた

男は確かに「学友」であり

「竹馬の友」ではあったが

僕は答えに戸惑った

彼が一瞬でも僕をそんな風におもっていたとは

彼は僕にないものを持っていた

「畏友」という言葉自体も僕の頭にはなかった

彼は詩集の「あとがき」でその語を残して

直ぐに他界した

言葉の後ろに彼が見える

彼こそは僕にとっての「畏友」

そこに居るだけで

それで「良い」友だった

居なくなったら

ますますその「良さ」が分かる友だった

カプリチオ
奇想曲・すんだ

村田辰夫

すんだか

まだだ

すんだか すんだ すんだか すんだ

なかなかすまん

このにぎり

すまん

すんだか まだか すんだか すんだ

やぶさめのうまのあしげのすなぼこり

すんだか すんだ すんだか すんだ

やはまとはずれちゅうにうき

やはまとうって ときに ばらばら

すんだか すんだ

すんじやった すんじやった

もうすんだ

こころのうちはもうすんだ

いやまだすまん

すみません

じらすな

すまん

おまえのだいじはまだまだすまん

すんだらいえよ

もうすんだ

はい

すんだ

すんじやった すんじやった

はい

もうすんだ

もうすんだ

みてる みえてる

みえてる みてる

ものみな みてる

みえてる みてる

ちるちる みちる

ちるちる みてる

いちようのはつぱ

ちるちる みてる

ぎんなん

ぼとり

くなんが

ぼとり

そつとひろつて

いちようをみたし

もんくはいわない

ぎんなんなんぎ

ひとにはいわんが

みえてる みてる

ちるちる みちる

みんなちる

かつてはかつて

かつてはかつて

かつてにあらわれ

かつてにきえる

えてかつて

ああじゃった こうじゃった

うんじゃった うんじゃった

そう そう そうじゃ そうじゃ

かつては かつて

みのかつて

ももよがよいもみのかつて

あめのふるよも ゆきのよも

ああじゃった こうじゃった

じかんまちすも みのかつて

かつてはかつて

かつてにあらわれ

かつてにきえる

ほんにかつては

かつてはかつてにきえる

みのかつて

すんじゃった すんじゃった

なのになだいる

みのかつて

わしのしわ

さかさに

よんでも

わしのしわ

わしのしは

もうはばたかず

よそらごと

わしのしは

あとにのこらず

ここにはない

わしのしは

わしのしわなり

もめばでる

ちじみ ちじみて

ふるびたり

わしのしわ

わしのしわ

さかさにしても

わしのしわ

しょうがないな

もう

しょうがない

わさびでもするか

あおによし

なるほどそうか

しょうがなければ

だいもない

しょうがいなけりや

へいはなし

しょうがないなら

こもない

しょうがないなら

すだいこん

ごますりまくか

しょうがない

しょうなきところ

たいはない

そうもない

しょうがないな

もう

しょうがない

いんねんいんがか

しょうがない

しょうがないな

もう

しょうがない

友

清水 崇彦

友

分かったようで

分からない言葉だ

知っている人が

みな友であるわけではない

ふと顔見知りになっても

そのまま友になることはない

近所の人だって

よく知ってはいるが

それを友とは呼ばない

友であるためには

何か共通のくくりが必要だ

釣り仲間 山歩き仲間

料理仲間 音楽仲間

飲み仲間 いろいろある

だが 友と呼ぶには

それはあいまいなつながり

あまりに趣味的だ

どこか生き方が欲しい

ならば共通の目的の

組織仲間ならいいのか

企業とか団体とか

何か同志とか

それだって

よく知ってはいても

気のあわないヤツはいる

とても友どころではない

かえって始末が悪い

となると愛情か

否 愛情とは重すぎる

友ならば

むしろ共感だろう

共感仲間というのか

だが 共感はもともと

当たりさわりのない

人間関係

ぶつかりあったり

傷つけあったりするほど

激しくはない

かつて同じ場所で

頑張っていた仲間など

過去を共有する人間も

いるかも知れない

あるいは

同じ悩みをかかえた間柄

おたがいを理解しあい

支えあう関係

けれど

軸足はいつも自分の側だ

前足に体重をかけ過ぎると

むやみに相手に近づく

ほど良い距離感が難しい

きつと

いちばん大切なのは

相手を羨まないことだ

羨んだら妬みもでる

自分の体幹がぶれる

こう考えてくると

友なんて

そうそういるものではない

友がたくさんいる人なんて

孤独なことが多い

はなやかさに

惑わされてはいけない

無難なかかわりが

広がるだけで

深みがない

自分は自分だけなのだ

つまりは思いいたる

人と人のつながりは

あいまいなものだ

それは

人のところが

つかみどころがないからだ

せいぜい二割ていどのところで

理解しあっている

さびしいことだけれど

本当のことだ

それでいいのだろう

それでも

そんなさびしさを

共有できる人だったら

もしかして

いい「友」に

なれるかも知れない

ポケット

武西 良和

——□に何が入るでしょう？

□の入った詩を黒板に張り

□に入ることばを考えさせて

発表させ

授業を終えた

そのあと教室を出て

階段を一段一段下りるぼくに

子どもたちがやって来た

——先生、答えはなに？

——知らないよ。

——知ってるでしょう。

口々に言いながら子どもたちが
取り巻いた

——ここに入っているのと違うん？
ぼくのポケットに手を伸ばす

確信に満ちた

いくつもの小さな手が

あちこちのポケットに滑り込む

——ここよ、ここ。

ズボンの横ポケットに

——そこよ、そこ。

後ろのポケットに

——あそこよ、あそこ。

背伸びしてYシャツのポケットにも

でも見つけたのは

しわくちやになったハンカチ

いくつもの小さな手がつかんで
さらにしわくちやにってしまったので
気分もしわくちや

二階の教室から

くつついてきた子どもたちは
階段を下りきったあたりで
教室から遠く離れたことに気づいて
急にそわそわ

一人の女の子を皮切りに
つぎつぎと教室へ

——さようなら、バイバイ。

すべてのポケットにさよならしたように見えたが
左手に持っていたぼくの上着は
折り畳まれて
隠れたポケットに

気づかなかつたらしい

〈初期形は二〇一三年十一月二十一日（木）十五時二十分 I 小学校2年光組で授業を終えて。その後、手入れし、これは手入れ形。〉

分身たち

和比古

一期一会というが

出会いとは不思議なものである

ひとときの友で終わることもあれば

一生付き合うこともある

目玉男に出会ってよかった

表情は目玉全身に現われる

逆にそれにより

人間たちと仲良くしてきたし

仲間としても認められてきた

百面相だってできる

優しい目玉にもなり

厳しい姿にも変身できる

すべては目玉男の思いのままだ

いつも清々しい表情で

瞳全部を使つて生きている

ただ人間たちの争いには

目玉を閉じざるを得ない

ウインクをしたら

目一杯のよろこびを見せてくれた

互いに同じ道を歩いてきた友として

苦楽を共有してきたのだ

道化師は一体何ものだろう

影のようにいつも自分の傍にいて

自分と同じような動きをしている

一見、別の人格に見えるが

人生を同じように感じている

道化師は表情を自由に変えられるため

自らの気持ちを直接見せることはない

器用に振舞いながら

巧みに人間たちと対応してきた

逆にすべての行動の裏を見透かしてきた

このようにしてこれまでの道程を

何とか歩んできたのだろう

自分は人間でありながら

人間らしくない人間だと思う

目玉男と道化師たちは

友というより

自分の化身かもしれない

彼らの気持ちは理解できる

だからこそ付き合ってこれたのだ

これらも繋がつていきたい

これが生きるということ

上弦の月が

秋月 夕香

夕刻を待たずに

姿をあらわし 澄み切った空に

ぽっかりうかんでいる

ゆうすげのつぼみが 日ぐれをまたずに

深い山の斜面に

そろそろふくらみをます

月の光が ようやく届くころ

ういういしく花はひらいている

可愛い爆発！

サーフィンウェーブのように

つたわっていく

月は目をみはる

ゆうすげは長い睫をあげて

ざわめいている

あつ お月様が・・・

はじめて月を見た

始まるひと夜だけのいのち

世界

小湖舎伸行

世界は狭くて広い

どれほど抗っても無知は変わらない

その何も知らない世界で出会った人は

どれほどの価値があるのだろうか

「僕の友達は素敵だ！」

は、世界が笑いそうな台詞だぜ！

それでも言うよ

「世界は素敵だ！」と

僕たちが生まれてきたことに意味があるなら
僕たちが出会ったことにも意味があるんだ

この広くて狭い世界で僕たちは出会った

そして旅をはじめたんだ

「君はどこまでも自由なんだね」

そう言ってもらいたくて僕は笑った

レモンとサイレン

小湖 舎みなみ

忙しいという怠惰な言葉で大人たちが時間を汚していく傍らで、私たちは好奇心に埋もれて過ごした。

たった3分足らずの砂時計をひっくり返して、きみは私に「時間に終わりがああるなんて信じられる？」と聞いた。

「そんなこと考えたこともないよ」

さいきん私は時間という生物に魂をゆっくりと侵食されていくように思うよ。

種が芽吹き、双葉からは本葉が生え、茎は伸びて、蕾は膨らみ、花は惜しむ時間だけを与えて散っていく。

それを繰り返すうちに時間は残酷なものだと思えてしまったんだ。

私は無垢でいることに飽きてしまった。一方のきみは時間に逆行するように新しいものを探求し続けた。大人たちには理解

されない空間に生きたね。

私ときみには時差が生まれ、その溝は広がるばかり。

あの日、空が凜と澄んだ日曜日、ほんと私は私、時を刻む赤いサイレンとすれ違っていたんだよ。

厨房のレモンが腐っていたんだ、見た目では全然わからなかったのに、ナイフで真つ二つにするとぶしゃつと潰れたんだ。

そのとき、予感が過ったんだ、腐ったレモンを見たのは初めてだったからいや違う本当は。レモンのせいにしたかっただけで、私はずっと前から知っていたんだ。

鼻をうんとくレモンの匂いが残っているよ、今もまだ。

エーは防衛本能に少しずつ殺されていくけれど、あの日、晴れた秋の朝、穏やかな空の下、美しく澄んだサイレンの音、それらがまるで砂浜のように懐かし耳にへばりついたままでいるよ。私の時計は狂ったままでいるんだよ。

私は今でも大人になりきれないままで、きみとの距離だけ離れていく。

今日も私は時間に逆行する光になって、あの日のきみに会いに行くよ。

いつまで会ってくれるのかな？

詩人の魂

上村 多恵子

今日も明日も

私は出かけるだろう

世界のどんなところでも

詩人の魂に出会いに

その魂と

響合うために

言葉の違いを越えて

詩人の魂を

声で聞く

詩人のたたずまいを

目の前で見ると

詩人の人生の生き方を

その過ごした

その有りようを

生々しく

掴む

どうしても満たされない

満たされなかった

魂の叫びを

言葉で

詩で

埋めるしかなかった

同類の

不器用に

孤独をかかえ

歩んできた友に

会うために

多くを語らなくてもいい

お互い

うなずき合い

同じ空気を

分かち合い

今生の地球上で

出会えただけでも

良かったと

一緒に

肩を組もう

今日もそして明日も

私は出かけるだろう

詩人の魂の

還るところを

見つけるために

真の友

さき あけみ

出来るなら

済んだことにとらわれず

愚痴を言わずに 生きて行きたい

あの時 こうすれば良かった

あの時 こう言えば良かったと

心に思っていることを

封じ込めては

後悔の山が 高くなる

私が生きて そこにいるなら

結果がどう出ようと

私はこう思うと 伝えるべきではないのか

私が 呼吸している

そう感じられなくて

私は 私を避けている

回りの人を 避け

回りの人からも 避けられている

この私が 私の真の友になれば

どんなに素晴らしいだろう

私は私だと 励ましてもらえたのなら

私は 今を生きる 私になれる

アサノさん

市原 礼子

中学一年の体育の時間だった

その日はマラソン大会

運動場でスタートして

校外の道を走り学校に戻ってくる

校門が見えている道を

私は息もたえだえに走っていた

歩いていたのかもしれない

何人もの子が追いぬいてゆく

突然 横を走っていた子が

私の腕をとった

私の腕を抱え上げて

がんばって と言った

アサノさんだった

同じクラスの女の子だった

そのままいっしょに走ってくれた

私たちはいっしょにゴールインした

いっしょに走っているあいだ

私の貧弱な腕は

アサノさんの胸のふくらみにふれていた

アサノさんの体温を感じながら走ったあの時

それからの長い年月

幾度となく思い出す

私はそんなふうに

人に手を貸したことがあるだろうか

ともだちという言葉をきくと

なぜか アサノさんのことをおもいだす

アサノさんはいつも

そぼくな笑顔であらわれる

友よ

長岡紀子

気ままに訪れる友 風よ

わたしをそっと抱きしめ

わたしの周りで緩やかなステップで踊り

融きほとしては また踊る

長い旅の話は いつも私を有頂天にして

南へ去っていく流浪の旅人よ

時には仲間を引き連れて 暴れまくり

向き合うものは何でも壊していった

わたしの意にならぬ友よ また会う日まで

ベランダに毎朝やってくるまじめで用心深い友よ

そんなにおどおどキョトキョトしないで

ゆったり止まっておいで

チツチツチュンチュン チツチュチューン

夜明けを知らせ わたしの目覚めを促して

歌ってくれるやさしい時計

寒くなると ふっくらまるやかにおめかしして

いつも自由に羽ばたいていく

なんと今朝（けさ）の朝焼けの荘厳なこと

樹や花はその場を離れないからいつでも会える友

会うたびほんのちよっぴり背伸びして

茎に生えた緑の天使の羽もふんわり大きく

ある日 かたい蕾が青い花びらを開き

お隣さんは赤い花びらを小さく開き

言葉は ないけど

わたしを喜ばし励ましてくれる

夏の日々 雨は降らず 陽の光は強く続いて

友は頭を垂れて 手足を折り曲げ

それはそれは哀れな姿になって

いつかは枯れていくその姿 私もいつかは同じだよ

今日も友との出会いを待っているわたし。

親愛

浜田 千秋

死のうとしたとき

あなたのことを思った

何年会わなくても

心の距離は変わらない

互いの日常など知らなくて良い

世間話などしなくて良い

仮にあなたが投獄されても

私は何も聞かずお菓子を届けに行く

そしていつものように

映画や音楽の話をするだろう

あなたもきつとそうしてくれる

夫婦のような契約でもなく

恋人のような情熱でもなく

義理も義務もなく

見返りなど求めない

信頼とは、

こんなにも静か

いつもあなたを誇りに思う

あなたに知られて恥ずかしいことは

しないように生きようと思う

声を大にして

加納由将

どんな感覚ですか

風を切って自分の足で走るといのは

公園でぼんやり座っているのは

どんな気分ですか

電話で急に呼び出されていそいそ出かけるのは

色々話しながら長距離のドライブを二人するのは

夜中に気のあう友と繁華街を練り歩くのは

始発電車で帰ってこっそり部屋に潜り込むスリルといのは

同じように生まれてきたのに

多分一生味わえない感覚で気分でしょう

やっとそれでいいと思うようになりました

だって体が違うんですから

同じだと勘違いするから

イライラするし焦るんでしょうね

前もって連絡を取り合って

パソコンで何度もシュミレーションして

やっとな現実になるのです

でもよく勘違いされます

同じようにこなしているように見えるからのか

何の違和感もなくこなすからなのかわかりませんが

とにかく同じだと思われているようです

違うんですよ、本当に

それを言いたいだけなんです

Siren

波野 仁

曇天

響くsiren

逆立つ神経

締めつけられる

魂

静寂（せいじゃく）よ 我が盟友（とも）よ

淫靡（いんび）で甘美な柔肌を重ね

慈愛に満ちた轟音で愛撫し

逝かせよ

静寂（せいじやく）よ 愛し盟友（とも）よ

卑猥な唇に仕込んだ

冷徹な刃を頸筋に添え

介錯を

病氣だった友

下田 喜久美

乳がんをしてから 肺癌へ 全身へ

十年は生きた徳本和子さん

詩の翼に乗って何年でも生きるのだと

その執念は生命の終末を書ききるために自分はあると決めていた

雄々しい翼がボロボロになって

遙か雲の上から宇宙へ飛び立つとき

市松の着物模様のような地球の波

その海をはるかに見て飛ぶ様子を詩に書いていた

いまも涙を誘う

仲間だった

詩人だった

カヌマの中で魔との闘いが繰り広げられる時

透明な感性が正確に生命を見つめていた

個と公との心を抱えて

永遠と一体になろうとして幼い子を残してゆく自分

四脚の椅子が三脚になる日のことをうたった日

母として子供に慰められる和子さんは

母のようなといって子供に甘えてもいた

今年の桜

道行く人

残された時間を思うと他人は何と

笑って過ぎてゆくのか

贅沢な時間がいとも沢山に消費されているという

あの陰りある緊迫した人の時間は今も私の中で生きている

彼女は知ったのだ

ガンジーが言ったように

「明日がないように 生き

永遠に生きるように 日々をまなべ」を

生きたのだ

「もう少し一人一人の友の幸せを祈る日々をくださいと」
下さい」とひたすら祈った

徳本和子が私のために

送ってきたのは星のかたちをした砂の少しが入った

白い封筒の手紙だった

彼女の真剣な私への祈りは私の肺腑に入り

私はそれ以来ずっと彼女に

回向を続けている

長い月日

根来 眞知子

「母が亡くなりました 百歳でした」

彼女からの電話を

ああ とうとう・・・という思いで聞いた

高校生となった春の遠足で

彼女と並んでお弁当を食べた

お邪魔したお宅は大きな医院

わあ お嬢さんなんだと知った

白衣のお母さんの凜としたたたずまい

彼女は彼女の

私は私の人生を背負った別々の日々

時にお誘いがあつた

時に私が誘つた

映画や展覧会を見た後

お茶を飲んでおしゃべりをし

すこしすっきりして

それぞれの家路を急ぐのだ

忘れはしないけど

忘れたかと思うほど会わないで居ることも

会えばこの前の続きで

という感じで話が始まる二人

遙か遠い一五歳の日々から

喜寿を迎えた今日までの長い長い月日

彼女に声をかけよう

いつもしていたように

もう少し時間がたつてから

秋のミモザ

北原 千代

持ち重りのする黄いろい房が

わたしたちのあいだに存在していた

烏丸通りの「幹」という店は学生の通い路から少し離れて

町のどこにも属さずほかに客はいなかった

そのひとはわたしのミモザを見つめ

ひと房分けてくれないかと言った

わたしたちはまだ二十代であおुकかたい睫毛をもっていた

身体の芯のふるえるような母語でそのひとは

ひと房のミモザを分けてほしいと懇願した

穏やかに急ぐ手を誘い

いちばんきれいなひと房をさしだした

そのときわたしたちのぜんたいが

紅茶碗のうえに交わったので

ミモザの生まれながらの黄いろは覚醒した

まばゆいものがわたしたちを離れさせた

わたしたちはもう向かい合わず

何十回のミモザの黄いろが互い違いに過ぎていった

今朝そのひとのまばたきがつめたく止んだと

遠くから知らされなくても

秋の庭にミモザがかえされてきていた

あのときのひと房が数多のミモザを連れ

わたしの庭にかえつてきていた

遥かな洋上の島からここへ

だれの翼を借りてかえつてきたのだろう

ふたたび目覚めた驚きと生まれながらのミモザの哀しみを湛え

睫毛のない目をみはっている

持ち重りのする花房を両腕ふかく抱きとめると

幾十年のミモザの黄いろがわたしをぬらすのだ

朝の紅茶碗をやさしく倒し

秋ぜんたいをおおうまでに

詩の蜜酒

すみくらまりこ

北欧神話の女神フエイグ

その名にちなむフライデー

友―フレンド―もそうだ

神々の飲み物

詩の蜜酒を飲めば

誰しも詩人になれるという

そう言えば

友がヴァレリーの詩を

読んでくれた夜

ある酩酊感に襲われた

理性は何処かへ飛んでいき

時間もわたしも消えた

読んだあとに

こころが洗われて

善き人になれた

こころを共にし

一緒に苦しんだ

幸せになった

成らぬ恋を

瞬くまに輝かせ

実らせてくれた

ああ、詩の蜜酒よ

いまでも酔わないと

詩が書けない

非売品

平成三十年九月一日

(C) 日本国際詩人協会